

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 29 日現在

機関番号：32421

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350057

研究課題名(和文)ベビーサインを取り入れた育児の効果

研究課題名(英文)Effects of Baby-Signing on Childrearing

研究代表者

赤津 純子 (akatsu, junko)

埼玉学園大学・人間学部・教授

研究者番号：30130735

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：ベビーサインを取り入れた育児を行うことの効果について研究した。コミュニケーションを行う時にベビーサインを使っている母親とその子どもを対象とした。家庭訪問による縦断的研究からは、子どもは話し言葉を習得する以前にベビーサインを習得し自発的に使用するようになること、その後、ベビーサインを二語発話的・三語発話的に使用するようになることが明らかになった。ベビーサイン教室の横断的研究からは、子どもにベビーサインを使わせることによって、母親は子どもの要求をより容易に理解できるようになり、それから子どもに積極的に関わろうとするようになること、そして徐々に母親自身の育児ストレスが軽減していくことが示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to inspect the effects of baby-signing on childrearing. Subjects were the mothers and their children. They communicated with each other by using baby-signing. By the longitudinal study of home visits, it was confirmed that preverbal children learn baby signing and use it spontaneously, and later, they begin to use it by the form of two-word combinations and the form of three-word combinations. By the cross-sectional study of baby-signing classes, it was suggested that mothers are able to understand the children's demands more readily by having their children use baby-signing, and then they become more actively to take care of their children, and gradually, their child-rearing stresses are relieved.

研究分野：発達心理学

キーワード：ベビーサイン 母子間の情報伝達 母子支援

1. 研究開始当初の背景

(1) Acredolo, L.P. & Goodwyn, S.W. (1996) が提唱した「ベビーサイン」とは育児場面で使用される定型化された象徴的身振りであり、1990年代から急速に普及してきた。

アメリカでは個々の家庭で母親が子どもとのコミュニケーションを図る手段の一つとして利用し、使い方を教示する教室の普及や、様々なベビーサインの実践本の販売等により一般に広がっていった。また、日本では、アメリカ在住の日本人の母親が帰国後、その方法を流布するなどして広まり、現在ではいくつかの団体が作られている。当初はアメリカ手話 (American Sign Language) をそのまま使用していたが、その後は日本手話を使用、応用したり、子どもの発達を考慮し、より簡略化した手話を考案したり (近藤, 2004) など多様化してきた。

子どもは有意味語を話すようになる以前には表情、泣き、身振り、喃語等の様々な前言語的手段を用いて意思伝達を試みようとする。この前言語的な表現が察知できず、「『まだ、何もわからないのだから話しかけてもむだだ』と、赤ちゃんに声をかけずに放っておく」(志村, 1989) おとなも見受けられるが、ベビーサインを用いると、そのようなおとなもはっきりとこの時期の子どもの意思がわかり、スムーズにコミュニケーションを図ることができる。また、子どもには、おとなが発する言葉の意味は理解していても、構音機能が未発達なため、それに対する表出 (返事をすることや、自分の要求を自ら言葉を発して表すこと) ができない時期がある。この時期の子どもでも、ベビーサインを使用することによって自分の意思を率直に表現できる。

(2) アメリカでは、自発的に象徴的身振りを使うようになった子どもにベビーサインを直接教示し、その習熟過程の観察から、ベビーサインの習熟は話し言葉の発達を妨げるものではないことを見出した事例研究 (Acredolo & Goodwyn, 1985) や、電話インタビューという各家庭で母親たちがわが子にベビーサインを教示した結果を収集する方法を用いてサンプル数を増やすことでそれを検証した研究 (Goodwyn & Acredolo, 1993)、遅延モデルの提示、身体的ヒントや玩具や食べ物などの強化刺激の付与などの統制された訓練状況でのベビーサインの習得過程を吟味した研究 (Thompson, Cotnoir-Bichelman, McKerchar, Tate & Dancho, 2007) など、種々のデータ収集法によるベビーサインの習熟過程についての研究がなされている。しかしながら、育児法としてかなり普及しているベビーサインではあるが、現在の日本においては、その学術的な検討はほとんどなされていない。

(3) 本研究の研究代表者は現在までに、集

団保育児と家庭児について調査をしてきた。

集団保育児については、ベビーサインを保育の中に取り入れている保育園に通っている子どもの保護者、保育者を対象にした研究 (赤津, 2007、赤津, 2008、赤津, 2009・三浦・赤津, 2010) から、次の5点が明らかになった。

保育者は、子どもはベビーサインを用いることにより相手との意思疎通ができ、またそれにより子どもは精神的な安定を得ていると捉えている。保育者自身にとっての効果は、言葉をしゃべれない子どもの要求がわかりやすくなり、さらに自身も保育の中で身振りをよく使うようになったことである。工夫、改善が必要な点としては、繰り返し同じサインを見せること、保育者全員がサインを使えること、保育者間の使用サインについての打ち合わせを密にしておくこと、定着させるためには何回も実演して見せたり、CD、絵本を活用したりすること等が必要であること、また、子どもの変形サインを見抜くのが困難であること、保育者自身が覚えることが負担であったことである。保育者と子ども間だけではなく、子ども同士でもサインを使い、さらに2つのサインを組み合わせて文を作る子どもがいた。家でも使用し、保護者にも好評であった。よく使うサインは生活に密着したもので、季節の行事、気象など特別な場面に関するものはほとんど使われていない。

家庭児については、事例研究により、前言語的な活動から話し言葉へ移行していく過程の中で、ベビーサインがどのように使われているのかといくことを検討した (赤津, 2013)。その結果、子どもは、初期には、母親の言葉を伴ったベビーサインを受けてベビーサインをするが、次第に母親の言葉を聞き、対象物を見たりしただけでも、それを表すベビーサインを自発的に使用できるようになること。二語発話的なサインが見られること。などが示唆された。

2. 研究の目的

(1) 昨今は乳幼児の発している信号を察知できずに子育てに不安を抱く養育者 (母親) が多くなってきた。このような場合、ベビーサインを養育者と子どもとが共有することの利便性は高く、それにより養育者がより明確に子どもの意思を汲み取ることが可能となり、また子どもも適切に養育者に意思を伝達できる。家庭児について、ベビーサイン未習得時期 (生後5ヶ月頃) から、話し言葉を使用しベビーサインを用いなくなる時期 (生後30ヶ月頃) までの子どもの縦断的及び横断的調査を通して、養育者と子どもとのコミュニケーションの特徴とベビーサインの養育者と子どもへ与える心理的影響を検討することを目的とする。

(2) 研究期間内に明らかにしたいこと

子どもがベビーサインを教授され、ベビーサインを習得し、ベビーサインに習熟していく過程と、話し言葉が習熟することにより、それが消滅していく過程を、養育者と子ども間のコミュニケーション場面を中心に縦断的に詳細に捉えること。

ベビーサインを子育ての中に取り入れることによる、養育者と子どもの心理的な変化を縦断的・横断的に明らかにすること。

(3) 本研究の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義

現在、日本において育児法としてかなり普及しているベビーサインではあるが、日本におけるベビーサインに関する学術的な研究はほとんどなされていない。そのような中で、本研究の研究代表者は集団保育児と家庭児を対象とした縦断的研究を行ってきた。本研究では家庭児を対象として赤津(2013)で得られた示唆的な知見をさらに明確にすることを目的の一つとしている。ベビーサインについて研究することは、多くのベビーサインを取り入れた育児を行っている家庭での、より効果的な活用法についての示唆が得られ、また子どもの言語発達における象徴的身振りの機能を探る手掛かりになると考えられる。

本研究では家庭児について、赤津(2013)で得られた示唆的な知見をさらに検証、実証するためにサンプル数を増やすこと。養育者(母親)の子育てに関する心理的な変化を明らかにすること。の2点が新しい視点である。

3. 研究の方法

(1) ベビーサインを育児に用いている母子について家庭訪問により縦断的な資料を収集する。母親へのインタビュー、母子のベビーサインを用いた相互交渉場面の直接観察とビデオ撮影、人格検査・発達検査等を行う。毎月1回家庭訪問をして、縦断的に資料を収集する。対象母子は6組である。

(2) ベビーサイン教室に通っている母子について質問紙を配布することによって横断的な資料を収集する。対象母子は18組である。

(3) 本研究に関する研究論文・文献・資料を収集し検討する。なるべく最新の研究に関する文献や資料を収集し、ベビーサイン、母子相互交渉、言葉の発達等に関する知見を深める。

(4) 調査から得られたデータについては、順次資料整理と分析を行う。具体的にはビデオ映像のダビング・タイマー入力、インタビュー内容と、インタビューシート・観察シート等の整理、分析、人格検査・発達検査の結果整理、分析等を行う。

4. 研究成果

(1) 家庭訪問による縦断的研究からは、子どもは話し言葉を習得する以前にベビーサインを習得し自発的に使用できるようになること、その後、ベビーサインを二語発話的・三語発話的に使用できるようになることが検証された。

ベビーサインの使い方の変化・二語発話的サインの出現・ベビーサイン消滅のきっかけ

乳児期にベビーサインを用いる頻度の高かった子どもと教示者である母親とその子どもとのベビーサインを用いたやりとりについて、言葉を話し始めた生後16ヶ月から29ヶ月まで14ヶ月間に渡り追跡調査した結果から下記の知見が得られた。

子どもは教示を受けたベビーサインをどのように活用しているのか、話し言葉の出現により母子間のベビーサインの使い方には変化が見られるか、変化がみられる場合、その要因はどのようなものなのか、これら3つの観点から母子のやりとりを検討した。さらに母子のやりとりが、ベビーサインを中心としたものから、話し言葉を中心としたものへと変化していく過程を見ていくことにより、ベビーサイン消滅のきっかけは何なのかを探った。

方法

調査対象者：生後6ヶ月からベビーサインを習っている男児とその母親である。男児が生後16ヶ月時から29ヶ月時までの期間、毎月1回ずつ家庭訪問をした記録を分析した。この男児は、KIDS(乳幼児発達スケール)では、「理解言語」「対成人」「概念」が月齢標準を上回っている。

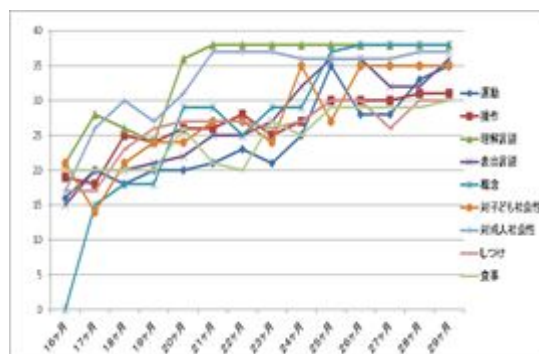


図1 KIDS結果

資料：1. 母親への聞き取り調査、2. 母子のやりとりのエピソード記録(補足としてビデオ映像)を資料とした。1については、現在使用しているベビーサインの種類(母子が互いに使うベビーサイン・母親は使用するが子どもは用いないベビーサイン・子どもが自発的に使うベビーサイン)と子どもの発語の

特徴を、2については、母子が絵本を見ている場面とおやつを食べている場面を分析対象とした。

結果・考察：

ベビーサインから話し言葉への移行

生後 16 ヶ月～18 ヶ月：母親が既知のベビーサインを使うように促しても、子どもはジャーゴンで応えようとする一方、新たに習得したベビーサインは自発的に使用する。19 ヶ月：一語発話の時期。発語できる単語に関してはベビーサインを用いなくなる。未知の単語に関してはベビーサインを用いる。

20 ヶ月：二語発話的ベビーサイン（2つのベビーサインの組み合わせ）が見られる。

21 ヶ月：二語発話の時期。自発的にはベビーサインを使用しなくなる。二語発話的ベビーサインは使う。

22 ヶ月：車、動物、色に関する単語を集中的に発するようになる。範疇化の意識が発生したと考えられる。同様に絵本に描かれた物とそのベビーサインと自分が所有している実物（たとえばラッパ）が対応すると認識できるようになる。ベビーサインを知っている子どもとサインを使って意思疎通する。

23 ヶ月：3 語発話の時期。初めて発語と共にベビーサインを用いる。

24 ヶ月：幼児音（語の転置）が見られる。

25 ヶ月：ベビーサインはほとんど用いないが、切迫した場面では発語と共に用いる。

26 ヶ月：話し方が滑らかになる。独語が見られる。

27 ヶ月：出会った乳児に「赤ちゃん」のベビーサインをする。

28 ヶ月：第二質問期。「貸して」のサインをして、相手が理解できないとわかると、「カシテ」と発語する。

29 ヶ月：平仮名、アルファベットを全て読むことができ、ベビーサインは使わない。

他児の調査においても、出現時期は異なるとしても出現順については同様の傾向がみられた。

このようにベビーサインは一語発話、二語発話の生成において言葉を先導するが、急速に言葉に置き換えられていく。範疇化の確立がその転換に対して重要な関わりを持つのではないかと考えられる。言葉が中心化すると、ベビーサインは言葉に対して副次的なものとなり、低年齢的伝達手段と本人にも意識されるようになる。（赤津，2014）

ベビーサインを使用している者同士のコミュニケーションの特徴とその利便性・三語発話的サインの出現

言葉の習得過程にある同胞間のベビーサインの使い方を調べることにより、ベビーサインを使用している者同士のコミュニケーションの特徴とその利便性について考えた。

二卵性双生児（女兒）について、生後 19 ヶ月から 30 ヶ月の期間に家庭訪問し、自由遊び場面の観察と母親への聞き取り調査を行った。

方法

調査対象者：生後 9 ヶ月からベビーサインを習っている二卵性双生児の女兒（A と B）とその母親である。生後 19 ヶ月から 30 ヶ月までの期間に毎週 1 回家庭訪問をした記録を分析した。KIDS（乳幼児発達スケール）の結果では「操作」の生後 24 ヶ月、25 ヶ月時、「表出言語」生後 26 ヶ月、29 ヶ月、30 ヶ月時、「食事」生後 26 ヶ月時以外は、B 児の方が優れているか、または両者共、同水準であった。多くの場合、新しい遊びを始めるのは B 児であり、A 児は B 児に追従している。また A 児はストレスのある場面では、ハンカチを移行対象として用いている。B 児には特に移行対象はないが、母親の乳房を恋しがるといった行動が見られる。

資料：子どもたちと母親とのやりとり場面の観察（エピソード記録とビデオ撮影）及び母親への聞き取り調査を資料とした。母親とのやりとり場面については自由遊び場面を、母親への聞き取り調査については、現在使用しているベビーサインの内容、子どもたちの発語の特徴、子どもたちの家庭での様子を分析した。

結果・考察：

ベビーサインを使用している者同士のコミュニケーションの特徴・ベビーサインの利便性

親子間でのベビーサインの使用頻度の変化については図 2 に示す。生後 23 ヶ月以降は、生後 19 ヶ月から 22 ヶ月までの時期に比べるとベビーサインの使用頻度が急激に減少している。

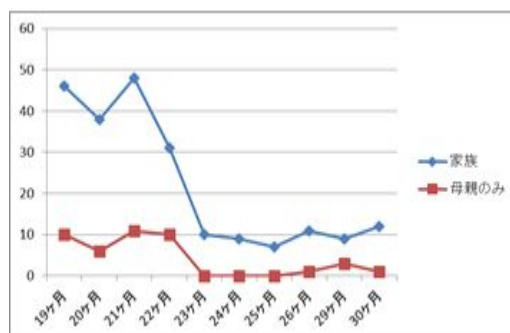


図 2 ベビーサインの使用頻度の変化

生後 19 ヶ月～20 ヶ月：一語発話の時期で、B 児は A 児よりも発音が明瞭である。B 児よりも A 児の方がベビーサインを使う頻度が高い。
21 ヶ月：二語発話の時期となる。
22 ヶ月：発語と共にベビーサインを使うこと

もある（他児の調査でも一語発話の時期には発語を伴ったベビーサインは見られなかった。2 つ以上の事柄を対応させる操作の発達との関連が考えられる）。また、A 児の方がベビーサインを用いて B 児に関わる場面が多い。お互いに言葉ではなくベビーサインを使ってその場の楽しい雰囲気共有して満足する様子が見られる。

23 ヶ月：両児共、三語発話的ベビーサインを使う（“ ママ オッパイ チョウダイ ” 実際には B 児のみ飲む）。言葉で要求することが躊躇される内容についてはカムフラージュする手段としてベビーサインを用いている。

24 ヶ月～：多語発話の時期となる。

両者は相手の言葉の習得の水準に合わせてベビーサインを適宜使用している。

言葉による表現が円滑にできる以前には相手が言葉を用いる段階に入っていたとしても自らはベビーサインを用いたコミュニケーションを行うことが多い。相手はそのベビーサインを理解できるので意思疎通は支障なく行われる。また既に言葉を上手に操れる段階に入っている子どもであっても、相手の能力水準（発語よりベビーサインの方が得意）に合わせてベビーサインを用いることにより、円滑に意思疎通を図ることができていることが明らかになった。

また三語発話的ベビーサインの出現が初めて確認できた。（赤津，2015）

（2）ベビーサイン教室の横断的研究からは、子どもにベビーサインを使わせることによって、母親は子どもの要求をより容易に理解できるようになり、それから子どもに積極的に関わろうとするようになること、そして徐々に母親自身の育児ストレスが軽減していくことが示唆された。

ベビーサイン教室に通っている母親の意識の変化

ベビーサインを育児に利用するためには、養育者がベビーサインを習得し、それを子どもに教示する必要がある。ベビーサインの習得の仕方としては、ベビーサインを教える教室や講演会に参加する、ベビーサインに関する書籍を読み独学で取得する方法がある。

ここでは、ベビーサイン教室に通う母親に焦点を当て、ベビーサイン教室に通うことによって、母親の意識がどのように変化するかを調査した。

現在、育児に対する不安を緩和するための子育て支援対策はいろいろととられているが、そのような中で、ベビーサイン教室は、教室に通っている母親のどのような育児に対する不安やストレスを緩和することに役立つのかを以下の3側面から検討した。

（A）子どもへの関わり方は変化するか

（B）子どもの気持ちや欲求が明確に理解できるようになるか

（C）子どもを養育することに関する不安感が和らぐか

方法

調査対象者：ベビーサイン教室に通う母子で0歳児クラス10名、3歳児クラス（継続クラス）8名の計18名である。教室は毎月1回ずつで6回を1クールとする。3歳児クラスは1クール終了後も継続して毎月1回開いている教室である。

資料：母親に対して、ベビーサイン教室に通ってからの母親の具合的な育児行動や感情に関するアンケート、日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙、PSI（育児ストレスインデックス）を配布し、その分析を行った。

結果・考察：

ベビーサイン教室に通っている母親の意識の変化

ベビーサインを習い始めた時期は、6ヶ月から12ヶ月の間で、平均8.9ヶ月であり、多くが模倣の始まる前後の時期に入所していることになる。

入室理由としては、言葉を話すようになる以前の子どものコミュニケーションを円滑にする手段としてベビーサインを取り入れたいと考えた、母親自身の生活の充実を図る手段として考えた（育児休暇中の時間の有効利用等）、消極的な理由（友人に誘われた等）が挙げられている。

ベビーサインを習ったことの効果については0歳児クラスと3歳児クラスとでは意識の違いがみられる。

ベビーサインを習い始めたばかりの0歳児クラスでは子どもとの意思疎通の手段としてベビーサインを有効利用し始めていること、また意思疎通ができることに母親自身が喜びを見出すようになっていくことが効果として挙げられている。

ベビーサインを経て既に言葉を話すようになっていく3歳児クラスでは、ベビーサインの使用により、意思が通じやすくなり、子どもが不機嫌になることが少なく、従って、母親自身も穏やかに子どもに接することが出来るようになったこと、ベビーサインを用いることで培われた子どもに対する態度が、その後、子どもに対して注意深く関わろうとする姿勢に反映されるようになったこと、が効果として挙げられている。

（A）子どもへの関わり方の変化

子どもに積極的に向き合っており、子どもとの時間を確保するように努力するようになる。

（B）子どもの気持ちや欲求の理解

子どもの欲求を判断しにくい場面でも理解できるようになる。子どもなりに考えていることを、子どもが使用したベビーサインを通して理解できるようになる。

（C）子どもを養育することに関する不安感の緩和

ベビーサインを習うことを通して、子どもの欲求が理解できる面が増え、安心感を得ることができる、子どもと向き合う時間が楽しく喜びを見出すことができる等、子どもを養育する上での不安感の緩和が図られる。また、ベビーサイン教室に通うことによって、同じような境遇の母親と知り合え親しい友人となれる、教室の講師に気軽に育児相談ができるので精神的に安心するといった、ベビーサインそのものではなく、教室という集いの場がもたらす効果もみられる。この他に、ベビーサインを使用することは発達的に遅れのある我が子への刺激になっており、それが自身の育児への不安の緩和につながると捉える母親もいる。(赤津, 2016)

引用・参考文献

赤津純子、ベビーサインから話し言葉へ、日本教育心理学会第 56 回総会、2014、11 月

赤津純子、二卵性双生児の情報伝達の円滑さとベビーサイン、日本発達心理学会第 26 回大会、2015、3 月

赤津純子、ベビーサイン教室の活動がもたらす母親の意識の変化、日本教育心理学会第 58 回総会、2016、10 月

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

赤津純子、母子間で使われるベビーサインの発達的变化、埼玉学園大学紀要人間学部篇、査読無、第 16 号、2016、未定

赤津純子 ベビーサインの使用が母親の育児態度に及ぼす効果について、埼玉学園大学紀要人間学部篇、査読無、第 15 号、2015、117-126

〔学会発表〕(計 3 件)

赤津純子、ベビーサイン教室の活動がもたらす母親の意識の変化、日本教育心理学会第 58 回総会、2016、10 月

赤津純子、二卵性双生児の情報伝達の円滑さとベビーサイン、日本発達心理学会第 26 回大会、2015、3 月

赤津純子、ベビーサインから話し言葉へ、日本教育心理学会第 56 回総会、2014、11 月

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

赤津 純子 (AKATSU, Junko)
埼玉学園大学・人間学部・教授
研究者番号：30130735

(2) 研究分担者

無 ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

無 ()

研究者番号：